

# 需要を創る！ 進化を続ける「木糸(もくいと)プロジェクト」・下

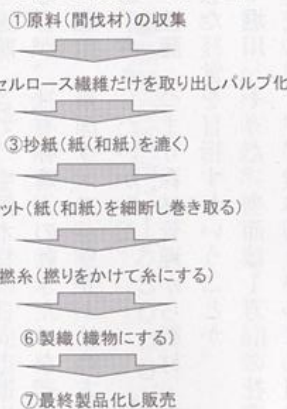
技術開発と販路拡大のネットワークに広がり

(前号からつづく)「木糸」を「進化」させることで、国産材の新たなマーケットを切り拓こうとしている(株)和紙の布(大阪府阪南市)の阿部正登社長。その阿部社長をサポートしている企業が、愛知県の一宮市にある。その企業とは、繊維機械メーカーのオゼキテクノ(株)(小関睦博社長)。さらに、「木糸」製品の販路拡大を目指し、東京都港区に本拠を置くハートツリー(株)(服部進代表)が販売総代理店として協力することになった。間伐材由来の「木糸」を中心としたネットワークが今、着実に広がり始めている。

スリットと燃糸で「木糸」をサポートするオゼキテクノ

現在、「木糸」を用いた製品は、図のような工程でつくられている。

「木糸」を使った製品づくりの工程



まず、天然繊維を有する原料をパルプ化し、紙に漉く(図の①②)。このようにしてつくられた紙(和紙)をスリット(テープ状に細断)し、撚りをかけると糸ができる(燃糸)。これが「紙糸」であり、とくに原料を国産間伐材にこだわった「紙糸」を「木糸」と名付けているのは前号で触れたとおりだ。

阿部社長はこの全工程の進捗状況等を管理しながら、自ら経営する和紙の布で、「木糸」を織り上げて最終製品に仕上げている。

この工程の中で、原料をパルプ化し紙に漉く部分だけをみれば、この製紙業でもできそうにみえる。しかし、「木糸」にして織り上げるためには、素材の特性をよく見極めて加工していく必要がある。この部分に、「木糸プロジェクト」の独自のノウハウが隠されている。そのポイントの1つが、スリット及び燃糸の工程(図の④⑤)であり、オゼキテクノはこの部分で、「木糸プロジェクト」をサポートしている。

# 需要を創る！ 進化を続ける「木糸(もくいと)プロジェクト」・下

戦後は表舞台から消えていた「紙糸」に再び脚光



社長 小関睦博「木糸」のベースである「紙糸」そのものの歴史は古く、20世紀前半までは日本や欧州などで広くつくられていた。オゼキテクノの小関社長は、「戦前・戦中は国策として年間2万トン程度の『紙糸』が

国産されていた」と言う。しかし戦後は、海外から素材が入りやすくなり、国内自給の必要性が薄まるとともに、綿紡績や化学繊維の製造技術が発達し、「紙糸」の生産は低調になっていった。

だが、そうした中でも小関社長らは「紙糸」づくりに注力し続け、今では他社には真似のできない独自の製造機械とノウハウを持つに至っている。このところ需要が伸びているのは、マニラ麻を原料にした「紙糸」と綿糸を撚り合わせた

製品で、婦人用の夏物セーターなどに使われている。



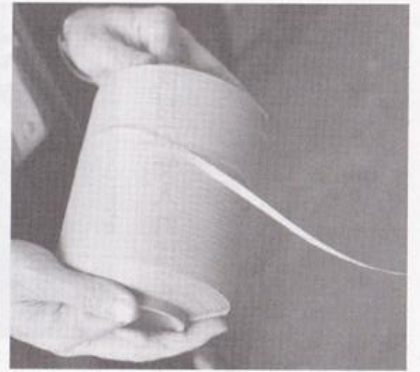
今年増設した第2工場の内部

小関社長によると、「紙糸」の年間生産量は、事業開始時の約20トンから現在約120トンにまで増加。スリッターを1台から6台に、燃糸機も1台から7台に増やし、今年になって第2工場を増設した。それでも、「なかなか注文に追いつかない」という状況だ。

間伐材の受入れは2トンから、壁を突破し販路拡大へ

「紙糸」の需要が伸びてきたことを視野に入れながら、阿部社長は国産材にこだわった「木糸」をマーケットで定着させることを狙っている。そのためには、品質と価格という「壁」を乗り越え、販売体制を整えていかなければならない。

品質については、できるだけ強度を綿に近づけることを目指して



紙(和紙)をいかに細くスリットするかがポイントになる

いるが、これが簡単ではない。綿は、繊維の長さが30〜40mm。これに対し、「紙糸」の主原料であるマニラ麻は4〜5mm、「木糸」になる間伐材は1〜2mm。小関社長は、「繊維長が短いと、糸が硬くて弱くなる。この研究が必要」と指摘する。

最大のテーマだ。今のところ「木糸」を用いた製品は受注生産となっており、原料となる間伐材の最低受け入れロットは2トンとなっている。阿部社長は「1トンからでもできるが、どうしてもコスト高になる。受注が増えて量が増えれば、生産費は確実に下がっていく」と話しており、小関社長も「生産量が増えれば品質も上がる」と口を揃える。

販売については、ハートツリー(株)がパートナー企業となったことで、販路拡大に向けた体制が強化されつつある。同社は、間伐材の使用を通じて、森林の循環サイクルを促進することを目指している。これまでに、大手コンビニチェーンと連携して、国産間伐材の割りばしを普及する「アドバシ」プロジェクト(第266号参照)の

展開や、スポーツ選手やアーティスト向けのグッズとして、間伐材を使用した製品の企画提案などを行ってきた実績がある。

今後は、サステイナブルな日本を広く訴えることのできる「木糸」製品を企画・販売していくことを検討している。

木から糸をつくり、布に加工する一業界の縦割りを超えた斬新な挑戦がパートナーの輪を広げ、新市場という分野を切り拓こうとしている。

間伐材由来の「木糸」をどう活かしていくか

展開や、スポーツ選手やアーティスト向けのグッズとして、間伐材を使用した製品の企画提案などを行ってきた実績がある。

今後は、サステイナブルな日本を広く訴えることのできる「木糸」製品を企画・販売していくことを検討している。

木から糸をつくり、布に加工する一業界の縦割りを超えた斬新な挑戦がパートナーの輪を広げ、新市場という分野を切り拓こうとしている。